Ｖ章　有識者ヒアリング及び意見整理

Ⅴ章　有識者ヒアリング及び意見集約

１．有識者ヒアリング

（1）ヒアリングの実施状況

本業務における有識者ヒアリングは、従来の「普天間公園（仮称）懇談会」委員ではなく、国営公園行政に詳しい専門家や普天間の水環境に詳しい学識者など、合計 4 名に対してヒアリングを行った。

図表　有識者ヒアリング状況一覧

氏名	所属	年月日	場所
①　小野　尋子	琉球大学工学部　准教授	H31 年 1 月 17 日	琉球大学
②　椰野　良明	中央大学　研究開発機構 機構教授	H31 年 1 月 29 日	日本公園緑地協会
③　町田　誠	(公財)東京都公園協会 特命担当部長	H31 年 1 月 29 日	東京都公園協会
④　花城　良廣	(一財)沖縄美ら島財団 理事長	H31 年 2 月 26 日	沖縄美ら島財団　本部

※ヒアリング年月日順

（2）有識者の意見

1）小野尋子氏

（小野氏からは、跡地利用計画策定業務と合同で、跡地利用計画における公園緑地の規模や配置に関して、おもに水環境の視点から意見をいただいた）

＜前提条件の確認と研究室からの提案（各種検討にあたって共通認識が必要な事項）＞

・大山の農地を集約化することで、該当区域の水需要はむしろ増大する。該当区域に給水できるのはアラナキガーとメンダカリヒーガーであり、ここからは、現在でも湧出量の 80%・91%を取水しており、ゆとりは全くない。なお、区画整理に伴う農地の規模と位置は、7 号線南側に集約される。

・また、将来農業需要がなくなったとしても観光の水需要は高い。以前、ラグナガーデンからの取水の打診があったようだが、地下水位上昇の懸念から組合が断っているとのこと。

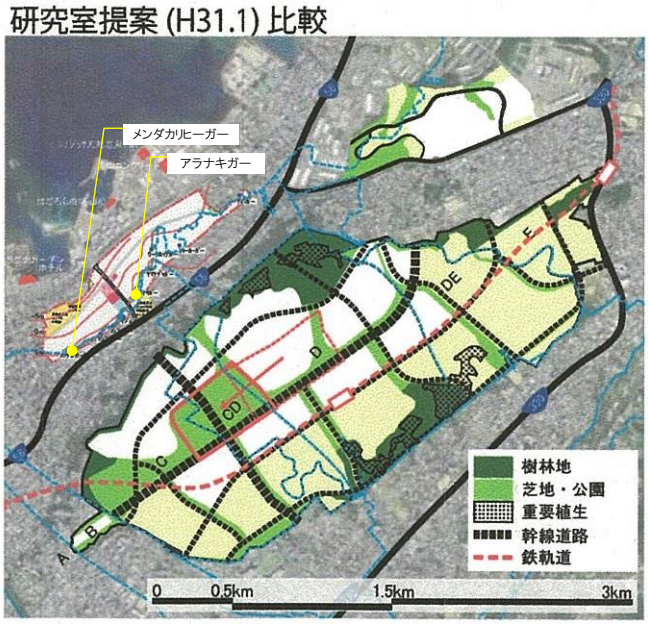
・「緑地以外にも、透水性舗装や浸透桝で涵養すればよいのではないか」という考え方もあろうかと思うが、メンテナンスコスト、環境の持続可能性から、緑地を基本とすべき。透水性舗装や浸透桝は目詰まりなど能力の限界がある。琉球石灰岩の透水性能を積極活用するには芝地が優れている。

・市街地の表面流出係数については 0.4 とされているが、那覇新都心の緑の多い住宅地である天久住区で計測したところ 0.75 であった。地下水涵養能力は低い。

・Ｄ流域のフルチンガーについては、いくつかの理由で今のままでは使えないと考えられる。その理由としては、①地下ボックスカルバート内の貯留池構造に問題がある。②現在は農家が定期的に目詰まり除去して使用している、③区画整理事業では配管の更新はできても貯留池の工事ができない、また区画整理後の農地の配置と合わない、等である。

・跡地利用において「公園を中心に配置」という話が出ているが、跡地整備後は周辺の既成市街地と連担するため、跡地の真ん中に配置する合理性はないのではないか。宜野湾市の真ん中とすればＤ流域でもＣ流域でも同じではないかと考えられる。

・以上より、大規模公園の一部は、ぜひＣＤ流域（アラナキガー、メンダカリヒーガーの集水域）に配置してほしい。植生が現存する東西のエリアを公園とすることは研究室提案でも同意見であるが、それ以外の箇所について、提案の配置からわずか 500m移動してほしい。十分可能だと考える。



図表　Ｄ流域に位置する緑地をＣＤ流域に移動する場合の模式図（小野研究室作成、ヒアリング記録者にてカー名称を加筆）

＜公園緑地の配置・形状等について＞

・跡地利用全体でみれば、「どの流域で緑を残しても地下水涵養の総量は同じと考えてよい」という考え方もあろうかと思うが、総量が同じであっても需要とのバランスが重要だと認識すべきだ。大山の区画整理における農地の位置は南側になるので、ＣＤ流域が重要。

・ＣＤ・Ｄ流域に配置が検討されている「研究開発ゾーン」について、緑地の中に研究施設がある姿として緑地率 50%くらいのイメージが想定されているかと思うが、今はそういっていても民間の土地としてしまうと、先々それが担保されるとは限らないので、公園緑地の形でしっかり確保してほしい。

・大規模公園の一部もＣＤ流域にあるという形になるといい。

・西普天間の状況を見ていると、開発で地下水の湧出状況が変わる可能性はある。喜友名側のどれかは枯れるかもしれない。伊佐処理場向けに水脈と同方向に地下配管したところ管の周りに水が集まってきて流れが変わったという例がある。ただ、流域を越えることはないので、流域の中で担保する必要はある。

・水脈上の緑地確保はそれほど意味がない。浅いところなら有効だが深いところではあまり関係なく、どの湧出口に向かうかは変わるかもしれない。

＜地表面の状況と水源涵養について＞

・一般的には「芝より樹林地の方が、涵養量が増えるのではないか。」と思われるだろうが、琉球石灰岩の特性から、芝の方が涵養機能が高い。もともと普天間基地のおかれた台地上は、水が十分になく粗放的な畑。しかし、その畑があることで下流に湧水が出る。地域の水の循環に重要な役割を果たしていたといえる。

・グラウンドは水源涵養地として評価可能である。那覇新都心で水環境に配慮した土地利用を研究した資料を託されているが、ここでも地下水で紛争になった経緯があり、琉球石灰岩が露出した中央部に公園と公共施設を集めた。国際高校もその観点で今の位置に配置したものである。小中

学校は自由に配置できないが、高校などの施設はＣＤ、Ｄ流域に配置してほしい。

＜国営の大規模公園としての魅力づけと緑地の特徴について＞

・琉球石灰岩台地という特異な地質をベースにした、地域の水とそこに立脚する沖縄ならではの文化と環境を守る、そのために 100ha の緑地が必要だということは、十分国営公園の根拠になりうるのではないか。この特色を生かした自然博物館をつくる案もあったのでは。エコミュージアムとして成立しうる。500ｍくらい移動距離があっても問題はないのではないだろうか。

・普天間公園（仮称）においては、まず東西の緑地が大規模公園ならではのものではないか、と思う。小規模な公園緑地が連続する団子状の公園という特色もつくれないだろうか。

・まちのつくり方にも関係が出てくる。アメーバー状で計画するのは難しいだろうが、うまくいけば良いものにできる可能性もあるかもしれない。

・水を守ることは、水循環基本法も制定されたことも重要だが、ここでは 100ha の大規模緑地の根拠ともなる。ただ単に国営公園ならその規模、というのではなく、この規模だからこそ地域の水循環と環境が保全できる、琉球石灰岩という特殊な構造の上にできたまちづくりを支えるのが緑地である、ということは重要な交渉材料ではないか。

・名水 100 選にも選ばれた垣花樋川、仲村渠樋川などは非常に魅力的で、県外からの来客もよく案内するスポット。石組みがあり若水もとるメンダカリヒーガーも同様な価値を有する資産であり、その意味からも枯渇させてはならない。それが石灰岩台地に寄っており人々の生活の基盤となっていると、県外の人にアピールできる要素でもある。そのための緑地確保は重要な意味を持つ。

２）榔野良明氏

＜まちづくり全体の観点と公園計画との連携について＞

・公園としての考え方も重要だが、周辺の跡地利用にも照らして、実際の都市計画に落としていったときにどういう公園がありえるのか、という考え方も同じくらい大切になる。
・「大きな塊としての緑を置くのではなく、小規模・分散・ネットワーク型」という基本的な考え方は良いと思うが、計画としてどんなに良い絵を描いても、実際に事業が進まなければ意味がない。説明があった借地公園や土地信託なども含めて、周辺の跡地利用計画と連携して色々な事業手法を検討していくことが必要となる。
・これまでの基地跡地の国営公園は、元々国有地・公有地が多く含まれており、所管替えなどで土地をまとめることもできたが、普天間では難しい局面も多いだろう。
・県民、地元、軍用地主の皆さんにとって、「軍用地が帰ってきて良かった」と思っていただけるまちづくり、公園計画が必要だ。
・「緑を核にした都市拠点」という考え方については、非常に良い。一方で、そうすることで「沖縄の産業として、今までになかったものが展開される」ということもセットでなければ、地域の皆さんには納得してもらえないだろう。
・「ネットワーク型の公園緑地」でも良いが、拠点部分はまとまった面積も必要。中間とりまとめの図から判断すると小規模であり、国営公園として整備を行うと言うには弱い。

＜まちづくりにおける緑の意味合い、土地のポテンシャルについて＞

・大阪の「うめきた２期」のように、都市再開発の中心に森や広場を確保するような例も出てきている。SDGs（持続可能な開発目標）への配慮の観点から、これからは、緑・環境と一体となった都市開発でないと、テナントが集まってこない時代になっている。
・このような視点から周りの土地利用計画ともっと密接に事業化を考えなければならない。普天間の現状に即して「緑と一体となった新しい地域」の姿を提案していくことが必要だ。
・実際の公園として形にしていく段階では、最初に県から説明があったような「緑の構造」や、「水系」、「土地の歴史」といった土地のポテンシャルを活かすことが必要になるだろう。先ほど例に挙げた「うめきた」などは、操車場跡地の再開発であり平坦な場所のため、土地のポテンシャルを活かしにくい面がある。
・国営公園で言えば、ひたち海浜公園などは、射爆撃場跡地で自由に計画できる場所だったが、十分に土地のポテンシャルを活かしきれていない面がある。例えば、水系全体を公園計画の中に取り込めていない点や、港湾計画との一体性に欠ける点などが反省点だといえる。
・土地の自然立地や歴史のポテンシャルを踏まえることは、自然に負荷をかけないまちづくりにつながる。

＜国が関わる理由、『記念』の明確化について＞

・国営公園は、有明の東京臨海広域防災公園を最後に実現していない。経験的にも国営公園の新設は、国の予算面からなかなか難しい状況にある。
・東北の国営追悼・祈念施設などは、都道府県が整備する公園の中に国の直轄施設が入る形であり、

地元自治体が整備する公園との組み合わせの中で、国がすべきことを決めていくことになると思う。

・沖縄県の場合は、すでにロ号の沖縄記念公園があり、それの3番目の地区として位置づけるという考え方はありえると思う。しかし、当然「国営公園として何をするのか？」について、絶対的な答えが求められる。

・「自然立地型」「ネットワーク型」は、公園計画としては良いが、国の公園事業としての目玉となるテーマにならないだろう。また、集落や並松街道といった「沖縄の歴史・文化」という切り口も、首里城に象徴される歴史文化と比べれば明らかに弱いのではないか。普通のテーマの公園では、地方公共団体の事業となるだろう。

・そもそも、ロ号国営公園という「全額国費で整備も管理もする都市計画施設」は、道路や港湾など他の都市計画施設と比べると特殊だといえる。ロ号公園として事業を実施する理由は、「国家的な記念事業等として決定したのだから、国が責任を持つ」ということに尽きる。その意味では、復帰 50 周年というのは政治的判断にもなるが、国家的記念事業としての理由になるかもしれない。

・改めて、この提案に基づいて進めていった場合、「国営公園にふさわしい『記念』として何ができるのか」を問い直すべきだろう。

・沖縄の場合は、歴史的な背景もあるので、他の地域に比べれば、「国が関与する理由」は明確にしやすいと思うが、そこが一番重要なのではないか。

＜沖縄振興につながる公園の姿－観光、都市魅力＞

・跡地利用計画全体としては、どのような都市的機能を誘導するかが重要と思うが、公園としては、「沖縄振興につながる公園」の姿をどのように組み込んでいくのかも重要だ。「沖縄振興」は、観光だけに限って考えるべきものでもないので、「都市の魅力に直結して人材を集める公園」を目指すといっても良い。

・例えば、もともとの土地利用を考えれば、沖縄の原風景を再現する公園というものが一つ考えられる。沖縄には、戦前の風景を残しているような場所が少ないので、それができれば一つの目玉になる。「沖縄の原風景」「平和な時代の風景」は 50 周年の記念としての訴求力もある。

・そうした基本となる考え方、インパクトのある目玉を県からも示していき、それが「県だけでは実現できない」、「国として関わる必要がある」ものがなければ、国の公園担当者も対外的に説明できないかもしれない。

・国営明石海峡公園の神戸地区では日本の里山風景・農村風景を活かした公園としているが、現実には来園者はまだ多くない。原風景を残すということだけで多数の来園者を集められるものではないので、これを活かしつつ、国として関与する施設などをどう組み合わせていくかの工夫が必要である。

・国営公園には、産業育成という面も重要なのではないか。海洋博公園の熱帯ドリームセンターでも、沖縄にランを始めとする新しい花卉産業を振興しようという考え方があって、研究機能を備えている。それによって、ラン、カランコエなど花の種類が増えて、産業振興に寄与しているのではないか。

・跡地利用計画全体に盛り込まれる都市的な産業、研究機能などでも、「沖縄独自の産業振興」と

いう観点に寄与できるものが必要で、それが公園と連携しているという姿が創造できると魅力的である。

・跡地利用計画としては、「緑の中に研究所がある」姿を描くべきだろう。環境に配慮した持続可能な都市開発をフランス政府が認証する「エコカルティエ制度」に代表されるように、近年の世界の都市開発では自然立地を活かし、地域経済に貢献する開発がトレンドとなっているので、跡地利用計画全体に対して、公園・緑地の観点から提案していけると良いと思う。

・ただし、自然や環境に関わる専門家のみならず、地元の人に喜ばれ、国が関わるだけの理由が見いだせるものにしなければならない。

＜区画整理手法について＞

・区画整理事業のような面積整備手法を取り入れなければ、地権者の中で公園や公共用地にかかる部分の方だけが買収され、公平性の面で課題を伴うのではないか。

・横浜市の上瀬谷通信施設の返還地については、土地区画整理事業の導入の検討や国際園芸博の招致を進めている。

＜博覧会・園芸博について＞

・返還跡地の大規模公園化やまちびらきの起爆剤として、博覧会を開催するということはわが国に限らず良く見られる。国際園芸博については、近年は、台湾、中国、タイなどでも開催されている。

・花は、多くの人を集める要素であり、ひたち海浜公園では近年、ネモフィラの丘を売り物にして、年間 200 万人を超える来園者を集めるまでになった。大規模花修景は参考になると思う。

＜国営公園の「中核」について＞

・「沖縄の原風景」自体は良いコンセプトだと思うので、それをベースにおいて、中核になる部分に、国がやるべき「なにか」を考えていく作業が必要だろう。

・先ほど説明にあった新しい琉球庭園なども良いアイディアだが、そのほかにも「中核施設としてコンベンション施設を置く」という考え方もあるかもしれない。しかし、単純なコンベンション施設だけでは、国としては、「公園に必須のものではない」とみなされることも考えられる。コンベンションというよりも、交流、コンサートも兼ねた多目的文化施設などが考えうるが、昨今のトレンドとしては、そうしたものは PFI 等で民間にやってもらう方が良いだろう。

3）町田誠氏

＜提言書について＞

・『普天間公園（仮称）への提言書』については、「教科書どおりのことが書かれている」という印象を受ける。全方位的・総合的な取りまとめとしてはこうなるのだろうが「実際に 2022 年に返還された時に、復帰 50 周年記念の国営公園として、1000 万人を超える勢いの来沖観光客に対して何を提供するのか」といったことを、現実に即して、もっと具体的に、かつ強く打ち出さねば実現しない。

・本当に 2022 年をめどに実現しようと思うのなら、「沖縄の観光振興や地域づくりの観点から、この場所での公園のあり方を決めうちしていく」というアプローチを取るべき。今の書き方は逆で、この場所の過去の歴史、経過、土地の状態などから導き出されてきて、ここに至っているという印象を受ける。

・2022 年に実現しようというなら、2020 年くらいにはもう具体的なものを持って活動していなければならない。「復帰 50 周年を契機に、沖縄の象徴的なもので、かつ沖縄の未来に対して積極的に働きかけるもの」、「こういうことなら国費を投入してでも作り上げる意味があるな」と思ってもらえるものを、もっと明確に、強い意志でもって打ち出していく必要があるだろう。

＜公園のコンセプトメークについて＞

・「大規模公園のあり方」において触れられている“ランドスケープイニシアティブ（緑が先導するまちづくり）”の考え方は、突き抜けていくような力を持ちえない。土地、地面、水面などから浮かび上がってくるようなものではなく、「沖縄を先導していく特別な力」とでも言うべきものでなければ、沖縄の未来を明るくする材料とはなりえず、多くの人を動かす力にもならないだろう。

・端的に言えば、もっと正面から経済のことを考えるべきである。「本当に、そこに人が集まってくるか」「何をめがけて人は集まってくるか」を考えるべきで、ランドスケープイニシアティブというアプローチからそこに突き当たるとは思えない。

・人間の腹の底から湧いてくるような強烈なコンテンツ、それを目当てに人が大移動して見に行きたいと思うようなものが必要である。例えば「太陽の塔」のような存在、爆発力があるような象徴的なものを作り上げるというような発想がなければ、最後の一線を突き破れないと思われる。

・例えば、沖縄が持っている太陽、空、海、大地などの力を示すようなアートに近い感覚、沖縄の気候や日差しなどを観光客に彷彿とさせるようなものであれば、観光客にとっても訴求力の大きなものとなるだろう。

・アートを取り入れた地域づくりとしては、瀬戸内海や新潟のような先行例があり、10 年、20 年と続けることで観光客を集め、地域にとって重要なものとなっている。沖縄であれば、もともとの地域のイメージが強いだけに、もっと強烈なアートの力があり、人が魅力を感じて集まってくると思う。

・歴史的な悲しい事実はともかくとして、実際に来る観光客は、今の沖縄が持っているポテンシャル、力の源泉に魅力を感じている。それを源泉として大規模公園を考えて行くべき。

・今までも、普天間に関しては、大規模テーマパークを誘致するような話があったが、そういうもののことを言っているわけではない。既存のテーマパークでは、逆に沖縄が持つポテンシャルを

活かすことができない。

＜プロデューサー、コンセプトメーカーについて＞

・公園の専門家に聞いても、今ある公園を超えるものは作れない。その枠を外して、世界的な「度肝を抜かれる」ような人を集めて話し合うような機会が必要ではないだろうか。イメージとしては、博覧会を行なうときにトップになるような方々、政治の色から離れた哲学や芸術家、思想家などの人材、そのレベルの提言がなくては実現できない。

・1990 年の大阪花博は小松左京氏、泉信也氏、磯崎新氏の 3 人が総合プロデューサーにあったが、文化人としてのトップが小松左京氏であり、泉信也氏、磯崎新氏の 2 人はそれを支える実務面のような存在だったといえる。誰もが一目置くような文化人のトップの発想が必要で、そうした人材と、沖縄で活動している芸術家などが語り合って生まれてくるようなものが説得力を持つと思う。

・今度の大阪・関西の万博に関しても、そうした文化人の粋を極めたような人材がいないように思う。例えば、歴代の文化勲章受賞者や文化功労者などで沖縄にゆかりの人材を見てみるなどの作業も必要ではないだろうか。

・そうしたレベルの方をプロデューサーにおいて、それを横で支えるポジションに公園の専門家がいるような体制の方が、誰に対しても説得力があるものとなるだろう。

・まず「文化」に大きな説得力があり、その次がもっと世俗的な「経済」の話、そのずっと後にやっと「ランドスケープ」が出てくるように思う。ランドスケープは実務的にちゃんとできればそれでよい。根幹的な「何か」を文化的アプローチ、アート的なマインドで探るというのが先決だと思う。

・文化面で、世界に広く訴えかけてきたような人でなければ、政府にも届かない。具体的にこの方、というわけではないが、例えば、ファッションデザイナーの山本寛斎氏のような存在感がある方、少し若いかも知れないが沖縄にも縁がある演出家の宮本亜門氏などであれば可能性があるかも知れない。

＜まとめ＞

・「おとなしく、わかりやすいもの」ではなく、「これからの沖縄の顔になる象徴的で強烈な」公園とすべきである。沖縄が抑圧されてきた何十年かを打ち破り、振りほどいて、新しい未来を見せるのだから、熱量が感じられければならない。

・成功かどうかはわからないが、「よくぞ、こんなものを作ったな」と感嘆させるようなものの延長線で公園のことを考えるべきである。受け止められ方という点では、北海道のモエレ沼公園や岐阜の養老天命反転地のような公園が考えられる。

・我々は、「優等生の公園のまま朽ち果てていくこと」のつまらなさに気づいている。だから、いつまでたっても、そこに込められた哲学や思想が衰えないようなものを突き詰めればならない。

・思いっきり飛び跳ねたものでなければ、国営化の事業は一歩も動かない。

・造園の世界の自己満足で普通の公園をつくるくらいなら、むしろテーマパークの方がまだましだろう。もちろん、それがベストなわけではないので、沖縄の内面から湧き出て、沖縄の血肉となるようなものを突き詰めてほしい。

4）花城良廣氏

■提言書について

＜21 世紀の万国津梁の舞台等について＞

・琉球王国の歴史は、東南アジアとのつながりがあってこそのものであり、「万国津梁」というキーワードは非常に良いと思う。

・「万国津梁」を今の時代に具体化するとすれば「国際交流」ということになろう。沖縄コンベンションセンターも近くにあるが、これからの時代の交流を考えれば、沖縄の良さを PR して皆さんに見てもらうために、人が集まる施設は欠かせない。

・一方的に沖縄のことを PR するだけでなく、東南アジアのみなさんが自分たちの文化を紹介する場なども考えられる。例えばコンサート空間の周りに東南アジアの花木を植えて、万国津梁を象徴するようなことが考えられる。

・地元の人が使いやすい公園であることが第一で、その結果、県外・国外の人が喜ぶというのがあるべき姿だろう。県外・国外の人のことばかりを考えると、県民が離れていってしまい、万国津梁につながらない。テーマパークのようになってはいけない。

・モノのコンベンションはほかにも施設ができているが、普天間では「人のコンベンション」を考えて機能分担をすべきである。

・沖縄の歌や音楽、MICE などの機能でもって交流を深めることも考えられる。

＜シマの基層、水・緑・自然環境等について＞

・沖縄県には、すでに 2 地区の国営公園がある。そのうち首里城公園が「琉球王国の歴史文化資源」を象徴する公園であることはいうまでもないが、海洋博公園について見れば、岬の海に接した立地、水族館や海洋文化館、郷土村のように海洋・島嶼文化に結びついた資源が中心であり、ドリームセンターはあるものの、「沖縄の海」を象徴する公園だと整理できる。

・このような整理を普天間の立地や環境に照らせば、第 3 の地区としての普天間公園（仮称）は、「沖縄の緑・花」を象徴する公園として、提言の内容を具体化していくことが考えられる。その際は、ドリームセンターなど海洋博公園の一部施設の用途や位置づけなどを整理することも必要になるかも知れない。

・普天間跡地全体については、緑先行型の開発という点はとても重要だろう。とくに地下水については、保全する仕組みが欠かせない。地下の状況を自然史として保全し、見せることも重要なので、まずはしっかりと調べた上で総合的に考える必要がある。

・公園として人を集めるには、花のイベントが有効ではあるが、国内では水族館や動物園は観光施設として人気を集める。一方で、植物園は、どこも苦戦しているのが実情で、冬のイルミネーションが一番の目玉だというところもある。

・植物園の誘客については、これからは、東南アジアの方々にもっと目を向けるべきだろう。東南アジアの方々は花好きが多く、花市場も盛んだ。ある調査では、「人口あたりでの家に花鉢を持っている人の数」でタイが 1 位、ベトナムが 2 位だったように記憶している。

・いわゆる、従来からの展示温室が持っていた教育的な要素だけではなく、快適で癒やされる空間づくりが必要になっているように思う。国営公園としても、全天候型で憩うことができる空間は

必要だろう。

＜沖縄振興等について＞

・これからの時代の国営公園を考えれば、その仕組み自体が変わってきている時期でもあるので、国営公園としてつくった後、運営は広く民間に任せるという考え方もある。ただし、民間に任せるところが多くなると、従来からの公園が担っていた公益の概念とは少し違ってくることもあり得るので、それは県の方でしっかりと考えておくべきことだろう。
・民間施設であれば、入場料をとって、色々とお客を楽しませることを考えていける。しかし、それを突き詰めればテーマパークになってしまうので、どこまで公共施設として投資し、機能させるのかが課題である。私としては、お金を持っていない子どもたちが入ることもできない施設ではいけないと思う。
・ガーデンズ・バイ・ザ・ベイのように民間企業に積極的にやってもらうところと、公共が担うところとを、上手に組み合わせることが必要である。
・海洋博公園でも、温室植物やランについては、園内にバックヤードを持っているが、草花については、地域の農家に多くを任せている。そうすることで、地元産業の育成にも貢献している。普天間公園（仮称）でも同様のことができるのではないか。

■国立の自然史博物館について

・普天間公園（仮称）には、沖縄を象徴する「自然環境」の要素が不可欠だろう。そのための中核的な施設として、屋内外をあわせた「自然史博物館」の設置が考えられる。
・自然史博物館は、一般的に国や地域を超えて活動するものであり、例えば、フランスの自然史博物館がアフリカの状況を把握している。アジアにはこうしたものがないため、中国が動き出している。そこで学術会議においても、日本の自然史博物館の設置を急ごうという動きがあって、その場所として、沖縄県が候補地の一つに挙がっている。また、沖縄県でも誘致活動を行なっている。
・沖縄に日本の国立自然博物館が設置できれば、その際は、沖縄県や南西諸島といったレベルを超えて、東南アジア、太平洋地域を見据える必要がある。
・近年、各地の自然史博物館は、「見せる要素」を強める傾向があり、いわゆる学習だけではなく、人をしっかり集めて研究の成果を見せていこうというものが増えている。
・有名なシンガポールのガーデンズ・バイ・ザ・ベイの温室は、シンガポールの気候は考慮せず、外国からの植物をたくさん入れて、冷温室で見せるエンターテイメント空間であり、私がいう自然史博物館とは考え方が異なる。沖縄の気候風土を活かし、東南アジアを見据えた自然史博物館であれば、タイ産のゴールデンシャワーの森、香港のパフィニアの森をつくるといった考え方もあるのではないか。
・水族館にしても、水槽だけではなく、研究機能やバックヤードがあるからこそ成り立っている。自然史博物館でも同じことで、研究機能はサステイナブルな発展のためにも不可欠である。
・ただ一方で、自然史博物館だけではそれほどの集客力があるものではない。人を呼ぶには「花と緑」が必要なので、その部分を国営公園が担うことが適当であり、その場合には、現在のドリームセンターのような規模ではなく、もっと大きなものを考えていくべきである。

■博覧会について

・海洋博公園では、33 年間、国際洋蘭博を続けているが、仮に普天間公園（仮称）が実現するのであれば、より那覇に近く集客に優れる普天間で開催してもよいだろう。

・より大がかりな国際園芸博を、公園のスタートアップとして開催することも考えられる。近年、台湾や中国では園芸博覧会の開催が増えており、ファンも多い。

2．有識者意見の整理

	① 小野尋子氏	② 椰野良明氏	③ 町田誠氏	④ 花城良廣氏
ア） 国営公園化に向けて	・琉球石灰岩台地という特異な地質をベースにした、地域の水とそこに立脚する沖縄ならではの文化と環境を守る、そのために 100ha の緑地が必要だということ流れが必要。	・国が関わる理由は「国家的な記念事業だから」に尽きる。逆に言えば公園は「国営公園にふさわしい『記念』として何ができるか」を明確にしなければならない。	・世界レベルの文化人のアイディアを具体化するような方法でのアプローチが良い。 ・「おとなしく、わかりやすいもの」ではなく、「これからの沖縄の顔になる強烈な」熱量が感じられる公園とすべき	―
イ） 国営公園の計画内容	・名水百選に選ばれた垣花樋川、仲村渠樋川、メンダカリヒーガーなどが石灰岩台地に寄っており人々の生活の基盤となっていることは、県外の人にアピールできる要素でもある。そのための緑地確保は重要な意味を持つ。	・ネットワーク型であっても中核部分の面積は必要。中間とりまとめの図で判断すると小規模で、国営公園で整備を行うには弱い。	・今までの積み上げで公園のあり方を導くのではなく「沖縄の観光振興や地域づくりの観点から、この場所の公園のあり方を決めうちしていく」というアプローチを取るべき	・海洋博公園が沖縄の「海」、首里城公園が沖縄の「歴史」であれば、普天間公園は沖縄の「緑・花」を象徴する公園となるべき
ウ） 公園の管理及び 経営の視点	―	・返還跡地の大規模公園化、まちびらきの起爆剤として博覧会を開催するのは常套手段である	―	・ガーデンズ・バイ・ザ・ベイのように民間企業に積極的にやってもらうところと、公共が担うところとを、上手に組み合わせることが必要。
エ） 当面の 調査、検討	―	・「沖縄の原風景」自体は良いコンセプトだと思うので、それを周りにおいて、中核になる部分に国がやるべき「なにか」を考えていく作業が必要だろう。	・公園の専門家に聞いても、公園を超えるものは作れない。その枠を外して、世界的な「度肝を抜かれる」ような人を集めて話し合うような機会が必要。	―
オ） その他 （公園）	・地表の透水性確保のためには、メンテナンスコスト、環境の持続可能性から、緑地を基本とすべき。透水性舗装や浸透桝は目詰まりなど能力の限界がある。琉球石灰岩の透水性能を積極活用するには芝地が優れている	・観光だけに限らず、産業や都市魅力も含めた「沖縄振興」につながる公園の姿を組み込むことが重要。	・もっと正面から経済のこと、「本当に、そこに人が集まってくるか」「何をめがけて人は集まってくるか」を考えるべき	・万国津梁を今の時代に具体化するとすれば「国際交流」ということになろう。モノのコンベンションはほかにも施設ができているが、普天間では「人のコンベンション」を考えて機能分担をすべき。
カ） その他 （まちづくり）	―	・公園とまちづくりとの緊密な連携が不可欠。 ・公園としての考え方と同じくらい、実際の都市としての計画に落としていったときにどういう公園がありえるのか、という考え方も大切になる	―	・跡地全体で、緑先行型の開発という点がとても重要だろう。とくに地下水について、つなぎ、保全する仕組みが欠かせない。 ・跡地全体の緑地空間を使って沖縄の自然環境を見せるような工夫が必要で、その中核施設としての自然史博物館と公園があるべき